

古今沿革考 柏崎永以

異説まちく 和田烏江

閑際筆記 藤井懶斎

独語 太宰春台

又楽庵示蒙話 栗原信充

南嶺子 多田義俊

南嶺子評 伊勢貞丈

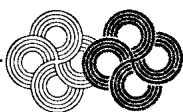


日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成 第一期 第九卷
昭和二年十二月廿五日発行
編纂者 日本随筆大成編輯部
代表 早川純三郎
発行者 吉川半七
発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成

〈第一期〉 17

昭和五十一年二月二十五日 印刷
昭和五十一年三月十日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五（代表）
振替口座東京二四四番

製作 株式会社 たんちよう社

解題

本集には、古今沿革考、異説まちく、閑際筆記、独語、又楽菴示蒙話、南嶺子、南嶺子評、の七種を収める。

古今沿革考 一卷

柏崎永以 著
後藤光生 編

本書は、古老茶話とは少々趣を異にした考証隨筆である。内容は、日本、西土、印璽、花押等から初つて、猪、野猪、摩利支天等に至る三十二項に分れている。所々図を入れて説明を補っているが、檜あふぎ、歩障、唐鞍、其の他何れも精細で美事である。終りに近い所の金銀の項にある古い貨幣の図は矢張こう集めてあると便利である。春の七草があったり、雷鳥や黄鳥なども図示してあるのである。加久繩は小麦粉の菓子なりと云うのがやはり図があるので説明と共に成程と思われる。後の考証隨筆にも現われるものもあるが、やはりこれはこれで楽しめる書である。

本書には、享保庚戌（十五年）の門人である後藤光生の序があり、これによれば、たまたま一師に謁した。師はもと官家に長じて、今は民間に遊歴して居られる。自分に話される故実は、はいままに 亶 卷冊に、載せないものである。官家の秘授でも後世是を誤り伝える事を恐れて巻帙と為した云々と云う意を陳べている。江戸刺草臣後藤光生題と署名している。ところで森銑三氏の「近世人物研究資料綜覧」（『森銑三著作集別巻』）を見ると、次の記事がある。

古今沿革考奥書 後藤梨春著

「享保元年丙申三月日 持明院基輔卿門人柏崎具元書於壺井氏寓居」

この識語を並べて見ると、一寸ちくはぐな相違も目につくのであるが、序文の方は師の著書の巻首に置くものであるからやはり信用してよいかと思う。奥書にある後藤梨春は光生の号と見てよからうか。奥書の方は本書の製作年代が享保元年、然も壺井氏寓居で書したと云う事がわかり、且、持明院基輔卿（基時の男、一字名兼、権中納言、正徳四年六月五日薨、年五十七）の門人であった事も知られる。基輔は基春に初まる持明院家の江戸中期の当流典型的な書体を残した人で、故実第一主義の書道家として知られている。永以に本書のあるのも故なきに非ずである。最後に本書旧刊本の書後にも引用してある藤原忠寄の奥書にもあるように、後藤光生の追稿の加えられて本書は今の形になって流布した事と思われる。藤原忠寄は大久保西山で、西丸御書院番で蔵書家としてもしられ、時々「愛岳麓藏書」の印は見かける所である。享和元年七月に歿している。本書再刊に当っては、安永四年写の大久保忠寄本と、享保元年^{丙申}三月云々の識語ある写本（いずれも内閣文庫蔵）とを校合に使用した。柏崎永以の略伝については本大成一期第十一巻古老茶話の条に抄記したが、其の節他の著書の所在などに触れなかったが、幸い森銑三氏の「近世人物研究資料綜覧」に記事があるのを抄記してこの稿を終りたいと思う。

泉堺記事 一冊（東京大学現蔵旧南葵文庫本）

小野小町考（彰考館蔵）

異説まち／＼

四卷

和田正路 著

本書は旧大成本によって初めて活字となって流布した本である。時代も江戸期のものとして古い方

に属し、内容も武家の行実、世俗の巷談、この中には著者が細井広沢の門人であったり、赤埴源蔵の叔父と云う高野貞寿と云う人と友人であったりしたためと思うが、赤穂義士に就いての小話も多い。記録、軍記物などについては、『前太平記』金平本のこと其の他の批判をしているが、『いくち物語』『醒睡笑』『可笑記』などは質なるものなりとしてほめられている。書籍の条などは尾崎雅嘉の「蘿月菴国書漫抄」に多く採用せられている。其の他見聞の記録も多く、本書によって知られる記事も多いことで、既に旧刊当時にも甚だ評判のよかった書であったと思われる。旧刊本の凡例には関宿藩の家老木村正右衛門から、水戸の小宮山昌秀（楓軒）に充てた書翰を掲げて、其の内容と人物を説明して居られるが、誠に当を得た処置と思うので、今又凡例より此を引用する。

此異説区々と申書二冊、御笑種に入貴覧申候。御一覽も相済候はゞ御返却可被下候。是は四五十年以前、藩中和田庄太夫と申者随筆に御座候。文学は河口三八門人、書は細井次郎太夫門弟に御座候。随分其比の諸名家之者、度々出会仕候由御座候。何か一向埒も無之事共出傍題に相認候隨筆に御座候。御閑暇之節御笑種に相成可申哉と奉存候。尤私亡父写置候而、乱書誤写多、御覧も御面倒に可有御座候哉与奉存候。尚万緒期重便候。頓首。

文化十癸酉二月十四日

和田正路に就いては本書の外に、何も加えるべき資料を知らないが、まだ関宿あたりで好資料の発見などもあればと、虫の良い事を考えながらこの稿を終る。なお旧刊本は無窮会神習文庫本によって活字化されたが、再刊に当っては、静嘉堂文庫蔵小宮山楓軒叢書（二〇八）本及び内閣文庫本間宮土信手跋本（文政十二年写）、明治九年七月松田文二郎
田邨常次校と云う写本を比較本として使用した。和田正路著述目録等を本書の巻末に添えた。

閑
筆記 和漢太平広記 三卷七冊

藤井 懶齋 著

本書閑際筆記は、著者歿後六年の正徳五年に、伊蒿子先生彙輯、門人稲葉氏校訂として刊行せられた。この稲葉氏は迂斎の事であろうと和田万吉博士は『日本文学大辞典』に記されておられる。丁度此の時分の迂斎は正徳元年二十八歳で京師に至り浅見綱齋に見え、留止三旬、聖学の要領を授かる。同五年三十二歳入て唐津侯土井利実^いに仕えて伴読に任じたと、梅沢芳男稿「稲葉迂斎先生事略」にある。懶齋との関係を一応考えてもよいかと思われる。本書は当時の識者の間には尊ばれた様であるが、年月を経る中に其の本が少なくなつたので、和漢太平広記などと云う仰々しい別号をつけて天明三年に再刻したのが本書であつた。懶齋を尊重する余りの改名であらうが、やはり原書名のすつきりしているに及ばない。改名の事は貫斎主人岡翼の「和漢太平広記引」に詳しい。

さて本書の内容は、医家であつた著者が一念発起、京都に出で山崎闇齋に從学して、儒家となり、京都に隠棲和漢仏の書に読み耽り、儒家としての立場から、和漢の逸事、僧侶の実体、其の他諸書を評したもので、文体に漢文直訳体の堅さはあるが、何れも読者を諾かしめるものがある。仏家を誹する事の多いのは、いつの世にも多い宗教商人の態度に耐えられなく、終に元政上人まで槍玉に上る事になったかと思われる。各記事小文が多いが、引けば必ずそこに著者の見解の見られるのも、読後感のすつきりした感を与えるものであらう。本書は人々によって種々のものをここから読み取ることが出来るよう。

藤井懶齋 名は臧^{ぞう}、字は季廉、懶齋、伊蒿子^{いこうし}等は号である。筑後の人で初めは真名部忠菴と称し、医術を以て久留米侯に仕えた。嘗て治療中の一病者の死に会い、治を誤によるとして、慨然^{きせき}を投じ

て事を辞したと云う。以後京都に住し、山崎闇齋に従学、朱子学を基として、和漢の学に通じて、京西鳴滝村に隠棲し、高理を談じ、隠君子の褒声が高かった。室鳩巢、米川操軒等友としてよかった。闇齋が歿して、鳴滝泉谷の西寿寺に葬られた事は、既に山本東海編「平安名家墓所一覽」にも見えてゐるが、その歿年享年が従来知られなかった。所が昭和十四年に故関田駒吉氏が「伝記」六ノ九号に「藤井闇齋の歿年」なる一文を草せられて、これが明になった。関田氏は谷秦山の「秦山日抄」から此を見出されたのであった。今其の墓記の所を抄出すると、

鳴滝村泉谷西寿寺地内、伊藤蘭齋墓表

伊蒿子膝翁之墓、碑陰有敘事云々、銘曰、山薺且聳、其聲^マ泉湧、喜吾首丘、永奉先壠、宝永六己

丑七月十二日歿、享年九十有三有二子、先死蔡子同区、革軒真子剛之墓

嫡男敬節墓表如此在翁墓之左

象水子膝

叔觀之墓

勇団平墓表如此在翁墓之右方

闇齋の伝は原念斎の『先哲叢談』巻四に収められ、著書も『本朝孝子伝』、『国朝諫諍録』、『大和為善録』、『睡余録』(静嘉堂写本)、『二礼童覽』、『蔵笥百首』、『竹馬歌』、『徒然草摘義』等が知られている。

独 語

一卷

太宰^{だざい}春台^{しゅんたい} 著

本書は、物云わぬは腹ふくるるわざと云う事で、著者晩年の頃、和歌、茶道、俳諧、淫楽(三味線)、箏、猿楽、俳優、又一般風俗の変遷を述べたもので、殊に三味線の変化に富む音調を嫌い淫楽として之を風教上より排撃している。春台は物の観かたの厳しい人である。其の上能の太鼓や笛等も能くしたと云う。「……今は士君子反りてよき楽しみを知らず、ひたすら浄瑠璃、三味線を好みてはれやかなる所にて、おめず憚らず、賤しき所作をして人の玩となる云々」と嘆いている。其の他

「我父は寛永の中頃に生れて、八十八歳にて享保の中比に終れり」に初まる懐旧談にも、世の変遷を陳べて亦興味あるものがある。藤井懶斎の閑際隨筆とは自ら別の面白味のある隨筆である。

本書は、百家説林本、本大成本等によって流布しているが、再刊に当って内閣文庫本の伴直方手校本、無名叢書第十四冊本、及び国会図書館蔵榊原家藏本を校合に使用した。

太宰春台は、字は徳夫、通称弥右衛門、号を春台、又紫芝園と云った。延宝八年九月十四日信州に生れた。服部南郭と共に徂徠門の双壁と称せられた。「義園雜話」に其の徂翁へ入門の有名な話があるから抄出しておこう。

春台は堀大和守殿家来にて信州飯田の人也。夫より京都に居られける時東野より徂徠へ謁せよと勧められしが、江戸へ来りて徂翁へ始て対面せし時、翁の才を窺はんために扇面へ釈迦と老子と并立ち孔子平伏の児図を翁に、其賛を頼ければ、直に筆を取て、釈迦釈空、老子談虚、孔子伏笑、と書ければ、太宰徂翁の才不可窺ことを喜び、弟子となれり。

『先哲叢談』（原念斎著）によると、初め中野搗謙の門人となって性理の学を修め、少時江戸に来り某侯に仕えたが、三十六歳より後は仕えず、遂に処士を以て終つたと云う。人柄はなかなか峻厳であった事が種々伝えられている。それだけ書物の校合等には一点一画の誤をも正して、余人の及ぶ所ではなかったと云う。人との無駄話はせず。酒も一二杯に過ぎず、夜四ツ時（午後十時）には酒を飲み直に臥したと云う事である。延享四年五月晦日、享年六十八歳で歿した。墓は東京谷中坂町天眼寺にあり、東京都の指定墓所となっている。

著書は多いが、『紫芝園漫筆』が崇文叢書に収められていて便利である。

又樂菴示蒙話

二卷

栗原信充くりはらのぶみつ 著

本書は、屋代弘賢の門人で古今要覧稿の編纂にも加わった博学の人の故実随筆だけあって、服飾、武器、調度の考説、さては見聞雜記の感想等興味深いものがある。甲冑についても函人の真の制作を知らなかったものを、若い時に南都勧修坊に伝わった伝授を若き人六七人に伝えたから、絶ゆる事はあるまいと云っている。故実関係の記事も単なる其の道の専門家の著書を見るより、其の博識によって読みやすい。殊に本書で最も興味あるものは二巻の末の数条で、太宰春台の「独語」にある茶人を評した文の反論である。元来儒家の評論の奥には治国平天下の爲めと云う觀念があつて、そこから物を云う所が多い。ここに柳庵は茶道の静閑より論を起して、春台の意の足らざる所を論じている。この末の方の数条は殊にすっきりとした論考で興味が多い。

本書は、旧刊大成本と同様に、無窮会蔵、井上頼圀編玉篋の中に収めてある著者自筆本によつて校合を行った。

栗原信充については、本大成再刊本第二期九卷「先進玉石雜誌」の解題に略述したからここには省略に随う。

南 嶺 子

四卷 刊本

多田義俊ただのよしと 著

本書は著者の随筆家方面の著書として世に迎えられた。巻頭に寛延二年の陶山晁と、讃岐の人良芸之伯耕の序がある。本書は内閣文庫蔵の刊本により、再刊の校合を行った際、左記朱筆注記を見たので、ここに補っておきたい。

(朱陶)「冕者本姓陶山 名冕 南潯ト号、尚善称、土佐産 東涯門人 初宮津侯ニ仕フ、後京師及び浪華ニ隠ル」

第二序の良芸之伯耕撰とある文中には、京都住居の節より二十年一日の如き交があり、「今也且終年於此、奇哉桂子、知者譽、不知者毀、毀譽亦大哉」等とも云つて居り、序中に義俊の略伝も述べているが、此文の上書入朱注に、

桂秋斎者俗ニ称ニ多田兵部義俊一 号ニ南嶺子一 初学ニ壺井鶴翁子一 元來浪華之人、來ニ江戸一 住ニ筑地一 寛延年中之人也 一説ニ九州阿蘇宮神職也云々

とある。阿蘇の神職はどうあろうか。あるまゝに此所に抄記しておく。

本書四卷は巻頭の「湖船風波論」から四卷末「神社になれたしむを論ず」に至る九十条、神道関係の記事其の他和漢の雜事を考証批判した記事である。本書卷二、著者の叔父で坂口幸因翁に、神明憑談を著した時に、其の競角の情をさとされて居る所がある。即ち「汝近年の神学者の惑ひを開んとする。其志は叱るべき事にあらざれ共、競角の情、書のおもてにあらはなり。学問は進むべし。おのづから貧なるべし。それ才に富ば貨に貧しく、貨に富ば才に貧きは古今の通俗なり云々」而して著者は「叔父の嘉言思ひ出さざるにはあらね共、近世の神学者誤謬多きをいかにせん」と嘆いている。然し南嶺子も必ずしも世を誹ってばかりいるのではない。次の項永楽銭の事を云う条には「塩尻」を引いて、天野氏は尾張の士にして、博達好事の一人のみ、と称している。

又本書は識者の認むる所でもあったであらう。小宮山楓軒は三卷六十条の「蕎麦を解事」の条を、其の著『懷宝日札』卷十に抄写している。

かく本書が流布するにつれて、伊勢貞丈の南嶺子評も書かれる事になったのであらう。本書卷末

に、門人山中游竜の書、「南嶺子後」の一文がある。松尾氏と共に出版の際校合にたずさわった由が見える。最後に、再刊に当り、内閣文庫蔵寛延二年版本により秋斎桂先生著述書目と刊記を補った。本書は、本随筆大成本及び『日本随筆全集』七巻によって活字となって流布した。多田義俊に就いては本大成二期十四巻の「蓴菜草紙」の条に略記したから、ここには省略に従う。

南 嶺 子 評 一 卷

伊勢貞丈いせさだたけ 著

本書は武家故実の大家として、著者が故実随筆としての南嶺子を一読、此も黙し難く一評を与えたものである。二巻の兼好の条、傀儡説、言語のなまるとなまらざる論、真野氏撰書の事、契沖を論ず、の数条に就いての反論である。武家故実を云う条には「みな妄作の臆説にして、故実と云べき事一ツもなし」と極言している。甚だ手厳しい評言である。

本書は、安斎叢書其の他に収められているが、本大成本再刊に当っては、内閣文庫蔵安斎叢書第十五冊（写本）によって校合を加えた。

伊勢貞丈に就いては、本大成二期第十五巻「あるまじ」の解題の時略記したので、同書を見られたい。

目次

古今沿革考	一
異説まち／＼	三
閑際筆記	一七
独語	二五
又楽庵示蒙話	二九
南嶺子	三三
南嶺子評	三七

(解題 丸山季夫)

古今沿革考

古今沿革考 序

諺曰、昔之劒、今之菜刀、上古之常碗、後世之茶器、尊卑替_レ品、所_レ採差_レ用也。思惟、梵漢雖宏大、變遷不_レ常、事理幾更焉。雖_レ為_二日本島居、皇統今日連綿、今官儀不_レ及_レ言、諸業亦各有_二其家_一而伝焉。然涉歲踰_レ月、家々伝稱不_レ可_レ無_二瑕釁_一。且中世有_二凶賊_一、而敗_レ國煩_レ民年久矣。當_二此時_一、雖_二學士勤_二螢窓_一、避_二矢石之難_一、而各隱_二山林_一、或雖_レ有_二秘府典籍_一、罹_二兵燹_一為_二烏有_一。當時偶雖_レ有_二殘冊_一、亦不_レ能_レ觸_二人手_一者、遂備_二虫蠹之食_一矣。是時哉、山崎油榨家以_二江次第_一覆_二缸桶_一、以_二駄鈴_一當_二店頭之麵餅_一。今也世治國豊、而到_二辺民村巷_一、慕_二古學士多起_一、而自_二寛永中季_一、梓刊之書卷、追_レ日行_二于世_一。自_レ此以下百有余年之治平、中古未_レ聞之處、如_レ予賤民亦秉_レ筆、論_二幽遠之古_一、話_二宏大之今_一。可_レ謂、神髓冠山、群螳戴粒、糸竹自雖_レ不_レ操清_レ耳、聖經雖_レ不_レ悟喜_レ意、故樵歌之詞、牧笛之譜、是吾常所_レ欲_レ正_レ志、爾而徑_二年久矣_一、間者、謁_二一師_一、師原長_二於官家_一、今遊_二歷於民間_一、話_レ予之故実、亶_二一所_一不_レ載_二卷冊_一也。予竊按、雖_レ為_二官家之秘授_一、以_二口伝_一則恐後人之誤為_二先師之繆_一矣。因揮_二腐毫_一以為_二卷帙_一、伝_二於深志學友_一如_レ左。

享保庚戌春分日

江戸刺草臣 後藤光生題

